

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：14303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K14794

研究課題名（和文）建築家・松ノ井覚治の日米における活動と作品について歴史的研究

研究課題名（英文）Historical study of the activity and works of an architect Kakuji Matsunoi

研究代表者

三宅 拓也 (Miyake, Takuya)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・助教

研究者番号：40721361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：京都工芸繊維大学美術工芸資料館松ノ井覚治アーカイブの資料分析、遺族所蔵資料の調査、米国の関連機関や新聞等のアーカイブの調査を通して、松ノ井覚治の日米における活動を検証した。新型コロナウイルス流行の影響により米国での調査が叶わず、米国時代の実作について十分に調査できなかったが、オンラインデータベースによって松ノ井の米国滞在時の足跡について成果を得ることができた。本研究により、松ノ井覚治が日米で受けた教育、ニューヨークでの生活と実務、修学と実務における同時代的評価、L・G・チェーピン一家との深い関係、帰国からW・M・ヴォーリス建築事務所入所に至る経緯、独立後の活動などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本近代建築史において看過されてきた建築家の活動と経歴を明らかにすることができた。なかでも、第二次世界大戦以前にアメリカに学んだ建築家の具体的な教育と実務の具体的な内容を、その同時代的な評価とともに明らかにできた点は大きな成果である。松ノ井を通して日本と米国の建築教育の水準を相対的に比較することが可能になるなど、今後の国境を超えた建築史研究に貢献する知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：Through the analysis of materials in the Kakuji Matsunoi Archive of the Kyoto Institute of Technology Museum and Archives, research of materials in the collection of his bereaved family, and investigation of the archives of related institutions and newspapers in the United States, I have examined Kakuji Matsunoi's activities in the United States and Japan. Although I was unable to conduct sufficient research on Matsunoi's actual works during his stay in the U.S. due to the effects of the COVID-19 outbreak, I was able to obtain results on Matsunoi's some footprints through an online database. This research clarified Kakuji Matsunoi's education in Japan and the U.S., his life and practice in New York, his reputation in his studies and practice at that time, his close relationship with the L.G. Chapin family, the process from his return to Japan to joining the W. M. Vories' architectural office, and his activities after becoming independent.

研究分野：建築史

キーワード：松ノ井覚治 建築史 BAID ヴォーリス アメリカ 図面

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

松ノ井覚治(1896-1982)は、1918年に早稲田大学で建築を学び(村野藤吾と同期)、卒業後すぐにニューヨークに渡ってコロンビア大学で建築意匠を学んだのち、現地の建築事務所で建築設計の実務にあたり、1929年には竣工時点で高さ世界一となったビルの主階部分に入るマンハッタン銀行本店の内装設計を現地建築事務所的设计主任として完成させるという、日本近代建築史上において特異な経歴を持つ建築家である。1932年に帰国した翌年からはヴォーリズ建築事務所東京出張所長を務めた。ヴォーリズ事務所時代には和風建築にいわゆるスパニッシュの意匠を加味した数江邸(国登録有形文化財)を担当するなど、帰国後も優れた手腕を發揮した。戦後は小寺工務店の役員・技師長を経て、1950年には松ノ井建築事務所を創設し晩年まで建築設計に携わった。

こうした輝かしい経歴とは裏腹に、松ノ井の名は従来の近代建築史において村野藤吾やヴォーリズに関連して紹介されるに留まっている。例えば、佐々木宏は村野藤吾との対談においてニューヨークに渡った同級生として紹介し(佐々木宏 編『近代建築の目撃者』新建築社、1977年)、山形政昭はヴォーリズ事務所の数江邸の設計担当者として言及している(山形政昭『ヴォーリズの西洋館』淡交社、2002年)。加えて、松ノ井の建築作品自体も僅かな事例を除いて知られていない。松ノ井の建築家としての活動期間を鑑みれば、日米の事務所スタッフ時代から多くの実作に関与しているはずである。具体的な作品に触れる先行研究には、ヴォーリズ事務所時代に担当した数江邸に関するもの(藤森照信「アメリカを生きた建築家:松ノ井覚治の数江邸」、『新建築』1987年9月号)、米国留学時代に描いたドローイングを紹介するもの(長谷川堯「松ノ井覚治のアメリカ時代のドローイング」、中谷正人・新建築社企画編集部・稲門建築会編『生まれ出づる空間への模索』新建築社、1999年)などがあるが、これらの研究においても松ノ井の具体的な関与の実態やドローイング制作の背景については資料の制限から十分な検討が行われておらず、考察の範囲も他の作品には及ばない。独立後の建築活動についての研究は皆無に等しい。また、従来の近代建築史における日米関係はヴォーリズのほか松田軍平や長谷部鋭吉といった著名な米国留学経験者を通じて語られ、松ノ井の存在は看過されてきたといえる。

2. 研究の目的

以上のような背景を踏まえて、松ノ井の活動実態を日米に残された一次資料に基づいて実証的に明らかにすることを第一の目的とする。さらに、村野藤吾やW・M・ヴォーリズとの関係を含め、松ノ井の活動を通じて日本建築界におけるアメリカの影響を検証することで、従来の近代建築史研究に新たな視点を提示することを目指す。

3. 研究の方法

そもそも先行研究が作品単位の断片的なものに留まっている最大の原因は、松ノ井に関する資料収集の困難さがあった。松ノ井の建築活動は戦前においては日米にまたがり、かつ事務所のトップではなかったこともあって戦前のメディアには名前が現れない(数江邸も戦後になって紹介されたもの)。独立後も松ノ井の作品がメディアに掲載された例は極めて少ない。何度か紹介されたニューヨーク時代のドローイングについても、分析は描かれている内容の範囲にとどまり、それが描かれた背景や相互の関係については調査が及んでいなかった。

こうした状況を踏まえて、研究代表者はこれまで京都工芸繊維大学美術工芸資料館の松ノ井覚治アーカイブを整理し、図面資料を用いて研究を進めてきた。本研究でも同様に一次資料の発掘と分析を中心に据える。本研究では、松ノ井覚治アーカイブの図面以外の資料に加えて、米国の関連機関、新聞等のアーカイブへと対象を拡大し、遺族への調査も実施した。

なお、研究期間中に発生した新型コロナウイルスの世界的な流行によって、計画していた米国の資料所蔵機関への調査は断念せざるを得なかった。そのため、米国時代の実作についての調査は十分に実施することができなかった。そのため計画を変更し、オンラインアクセスが可能な現地の史料データベースを発掘・活用することで、松ノ井の米国滞在時の足跡についていくつかの成果を得ることができた。

4. 研究成果

松ノ井覚治の経歴と活動¹

第1期(1896-1918): 学生時代

松ノ井覚治は、1896年(明治29)7月14日、山形市で貸家業と果樹園を営む父・久治郎と母・チカの間にもまれる。五男三女の四男であった松ノ井は、兄弟のなかで唯一、大学へと進むことになったが、それには次のような背景があった。松ノ井は、3歳か4歳のころ、炉端で長兄と遊んでいたところ、事故で燃えている炭の中に右手を突っ込んでしまい大火傷を負った。この時、右手の薬指と小指が曲がったまま癒着してしまう。すぐに上京し東京帝国大学医科大学附属医院に入院し手術を受けるも回復しなかった(薬指と小指は十分に成長せず、生涯曲がったままだったが、鉛筆を持つには差し支えなかった)。この怪我があったためか、両親は松ノ井の教育

には援助を惜しまず、学業の道を進ませたという。両親の意思はのちに長兄へと引き継がれた。なお、建築の道を志すきっかけとなったのは、山形市第一小学校の生徒時代に、授業で作成した木彫の出来を高く評価され、物を作る仕事への関心を強くしたためであった。

1907年に山形市第一小学校を卒業し、山形市高等小学校に入学。同校を1910年に卒業すると、山形県立工業学校（現・米沢工業高等学校）建築科に入学した。1914年3月、山形県立工業学校建築課を卒業。卒業設計は《日本住宅設計図》だった。これは木造二階建ての和風住宅の設計図である。1914年4月、早稲田大学理工学部建築学科予科に推薦で入学。この時の同級生に村野藤吾、松田軍平がいた。二人は共に本科へ進学、1918年6月に早稲田大学理工学部建築学科を卒業。卒業設計は《取引所》だった。

第2期（1919-1932）：ニューヨーク時代

早稲田大学を卒業後、松ノ井は海を越えてニューヨークへと渡ることになる。留学のきっかけは判然としないが、ヴォーリズとの出会いにあったと思われる。1918年6月の卒業後、近江八幡のヴォーリズ建築事務所を訪ね（親類からの紹介があったと伝わる）、翌年5月頃までに数回、ヴォーリズの誘いを受けてYMCAを訪問したという。松ノ井は並行して英語を勉強し、渡米の準備を進める。この年のうちに留学への出発を志していたが、山形県庁が留学手続きに不慣れで時間を要したという。5月18日、横浜港から天洋丸で出国。ホノルルを経由し、サンフランシスコに入港し鉄道に乗り継ぎ、サンフランシスコからシカゴまではSouthern Pacific Line、シカゴからニューヨークまでは20th Century Limited Trainに乗車して6月10日にニューヨークへと到着した。ニューヨーク到着後の3年間は、ヴォーリズからの紹介でL・G・チャーピン（ヴォーリズが設立した近江兄弟社の建築部門における最初の協働者。1913年に米国へ帰国）の家に下宿した。

ニューヨークに到達した松ノ井は、現地の建築設計事務所に勤め、またコロンビア大学のエクステンション・コースに通学した。この留学直後の動向については、松ノ井の妻・久が次のように書き残している。

留学することが決まった時、早速、（早稲田大学時代の恩師である——引用者註。以下同）内藤（多仲）教授に報告したところ、教授は「コロンビア大学に推薦状は書くが、大学でアカデミックなコースを取るよりもむしろ優れた建築事務所に入り、実際の設計技術を磨いて来て欲しい。日本の設計の進歩の為には米国の程度の高い事務所のスタッフになって経験を積んでほしい」と云われたので、早速その御助言どおりによく内容を調べて就職した。然しニューヨークまで来て全然大学に行かないのは真に残念に思われコロンビア大の夜間のコースを採った。当時の早稲田の教育は可なり程度が高かったのであろうか3ヶ所の事務所で最初から役立ち、喜ばれる図面を書くことが出来た。但し寸法とスペリングにはひどく悩まされた。（松ノ井久「松ノ井覚治年譜」より）

具体的には、松ノ井は1918年9月にコロンビア大学の夜学に相当するエクステンション・コースの建築学科へと入学した。主にHarvey W. Corbett准教授とMaurice Prévôt准教授に学ぶ。両者はいずれもパリのエコール・デ・ボザールに学んだ経験を持つ建築家である。大学では、親しみを込めて「Tokyo」というニックネームで呼ばれたという。コロンビア大学では、当時の米国の他の建築教育機関と同様に、ボザール・インスティテュート・オブ・デザイン（BAID）の公開設計課題を教育に取り入れていた。松ノ井もこれに度々参加しており、日本の大学で建築学を修めてから渡米していたこともあって参加直後から入賞を果たした。松ノ井が1924年に大学を離れるまでに11作品応募して10回の入賞を確認でき、そのうち1度は図面が『The American Architect』誌に掲載されていた（*The American Architect*, vol. 120, no. 2380, November 9, 1921）。

松ノ井は大学でデザインの腕を磨く一方で、日中は建築事務所で働き、設計実務の経験を積んだ。1921年12月までの間にTrowbridge and Livingstone Architects, A. J. Thomas Architect, A. F. Gilbert Architectに勤め、銀行、住宅、集合住宅などの意匠設計製図を担当した。また、この頃、ヴォーリズらが近江セールズ株式会社のニューヨーク出張所を設立したことに際し、松ノ井は、ヴォーリズが設計した大丸百貨店や大同生命本店・支店のための建築資材購入を手配にあたったという。L・G・チャーピンの存在に加えて、母W・G・チャーピンが近江兄弟社の設立当初からニューヨークでの同社代理人であったことから（W. M. Vories, *The Omi Brotherhood in Nippon*, The Omi Brotherhood Book Department, 1935）、松ノ井その役割が与えられたものと考えられる。なお、チャーピン家からは、毎年のクリスマスに建築関連図書を贈られており、松ノ井が研鑽を積む糧となった²。

このように建築の意匠設計や実務の経験を積んでいく一方で、松ノ井はYMCA等での活動を通じてアメリカの文化に深く触れた。これは松ノ井が「米人の生活に触れてよく理解しなくては、米人を満足させる図面がつかれないと信じて」（「松ノ井覚治略歴」より）いたことによる。松ノ井は渡米から3年間はチャーピン家に下宿していたが、1921年にブルックリンのYMCAの寮へと移り、寮生らとの親交を深めた。生活は努めて計画的で、健康に気をつけて飲酒や喫煙はせず、YMCAではジョギングや水泳などの運動を毎朝欠かさなかったという。松ノ井が所属した教会やYMCAでの活動への参加を現地新聞にも確認でき、その充実した生活がうかがえる。例えば、1923年2月には女性組合主催の展覧会に住宅模型を出品³、1926年2月には教会のコンサートに出資⁴、1929年5月には、YMCAで同会劇団の一員として演劇にも出演していた⁵。なお、松

ノ井は1927年3月から5月にかけて一時帰国し、牧師であり東京外国語学校教授であった英語学者・村井知至の娘・知（知子）と結婚した（知は1950年に逝去。松ノ井はその翌年に久（久子）と結婚した）。

ニューヨーク時代の松ノ井にとって最も重要な場となったのは、1921年1月から1932年9月の帰国直前まで所属したMorrell Smith Architects（モレル・スミス建築事務所）での日々である。同事務所にはL・G・チェーピンが勤めており、チェーピンからの誘いを受けての入所であった。Morrell Smith Architectsでは、同事務所が顧問を勤めていたマンハッタン銀行の各店舗、商業ビル、住宅等の設計と管理に携わった。松ノ井覚治アーカイブの資料にマンハッタン銀行ロング・アイランド支店（1927年竣工）の完成予想図や工事中写真が含まれていることから、松ノ井がこの設計・管理に深く関わっていたことが推測される。

こうした仕事の積み重ねから事務所内での信頼を得て、1928年から設計が開始されたマンハッタン銀行本店の設計に際しては、製図技師長（Head Draftsman）としてその設計を担当した。このプロジェクトは、ウォール街に位置した同銀行本店を超高層の事務所ビル（バンク・オブ・マンハッタン・カンパニー・ビルディング。現・40 ウォール・ストリート）に建て替え、その1・2階に銀行本店が入居するというもので、ビル全体の設計はH. Craig Severanceとその共同建築家であった松井保雄で、松ノ井は銀行部分の設計担当者として松井らと折衝を重ねながら竣工まで導いた⁶。

なお、1930年に独立直後の村野藤吾が海外視察旅行中にニューヨークへ立ち寄った際、松ノ井はバンク・オブ・マンハッタン・ビルディングへと村野を案内している。

ニューヨークで公私共に充実した日々を送ってきた松ノ井であったが、バンク・オブ・マンハッタン・カンパニー・ビルディングの建設中に起こった世界恐慌の波は建設業界にも厳しく、渡米から13年経った1932年、惜しまれながらも松ノ井は職を辞し、日本へと帰国することになる。辞職に際しては、所長のモレル・スミスから「松ノ井氏はおよそ10年間にわたって私の事務所に勤め、その間に彼の仕事はますます価値あるものとなりました。事務所における彼の仕事は非常に精力的であり、常に的確で丁寧なものでした。彼は最も信頼できる所員のひとりであり、鉄骨設計を除けば、あらゆる建築分野の仕事をごこなすことができる技量を備えています。最も優秀であるということに加えて、松ノ井氏は優れた人格の持ち主であり、良い習慣と気質を持ち合わせた人物でもあります」、所員のL・G・チェーピンから「1929年から松ノ井氏は事務所の製図責任者を務め、数百万ドルに相当する上級作品の製図や細部設計を直接監督しています。

松ノ井氏は万能の人です。彼は建築計画と細部設計に非常に長けています。彼は明快な考え方の持ち主で、疲れ知らずの働き者であり、常に信頼でき、頼りになります」、と記された紹介状を託されている⁷。ここからは、同事務所における松ノ井の働きぶり、寄せられていた信頼の厚さを窺い知ることができる。

第3期（1933-1943）：ヴォーリズ建築事務所時代

1932年11月に横浜へと到着した松ノ井は、妻の家族が暮らす逗子に身を寄せた。年末に、ここでW. M. ヴォーリズからヴォーリズ建築事務所への合流を打診する具体的手紙を受け取っている⁸。これを受けて松ノ井は翌年（1933年）1月に近江八幡のヴォーリズ建築事務所へと着任した。さらに1934年6月にはヴォーリズ建築事務所東京出張所（ヴォーリズ東京建築事務所）へと転任し、東京出張所長を務めた。

ヴォーリズ建築事務所では、大同生命札幌支店（1934年竣工）や佐藤新興生活館（現・山の上ホテル）（1937年竣工）などの民間ビル、聖学院男子中学部校舎（1937年竣工）や青山学院女子専門部校舎（1938年竣工）などのミッション系学校施設、亀井邸（現・数江邸）（1937年竣工）や蜂須賀邸（1938年竣工）などの個人住宅などを手がけた。

こうした日本での活躍は、アメリカで身につけた技術のみならず、帰国後の弛まぬ努力の結果でもあった。なぜなら、1932年の帰国直後が松ノ井にとって生涯で最も悩んだ時期で、「（アメリカと日本では）生活、文化の水準が余りに違っていたし、又建築の技術の点に於ても落差が大きかった。ニューヨークで習得した高度の技術は余に必要でなく、大して役立てることが出来ないと思った」（同前）ほどの困難に直面していたという。

松ノ井は、「特にコロニアルスタイルとスパニッシュスタイルを好み、精通して居た。日本ではスパニッシュは自分の右に出る建築家は居ないと語ったことがある」（松ノ井久「松ノ井覚治に関するメモ（2）」より）というほど自負していたニューヨーク仕込みの意匠設計の技量と、「和風建築の茶室などまで依頼されると熱心に研究して設計して居た」（同前）というような日本の建築文化に順応するための努力によって、その困難を乗り越えた。数江邸などに見られる和洋が融合した建築は、日米で建築を学んだ松ノ井の重要な到達点のひとつとして高く評価できる。

1943年3月、松ノ井はヴォーリズ建築事務所を退職する⁹。これは、戦時下の建築資材統制により設計事務所の業務がなくなったためであり、話し合いの結果による退職であった。

第4期（1943-1950）：小寺工務店時代

ヴォーリズ建築事務所を辞した松ノ井覚治は、すぐに小寺工務店株式会社の役員・技師長となる。小寺工務店は、松ノ井の早稲田大学時代の同級生である小寺泰が営む建設会社である¹⁰。ここで松ノ井は1950年まで技師長として建築設計に携わったが、資料発掘が進まず、詳細は明らかにできなかった。主な担当作品は東京機器株式会社（竣工年不明）や、ノース・ウェスト航

空コンパウンド（集合住宅）（1948年）がある¹¹。後者は建築メディアにも掲載されている¹²。米国航空会社従業員の生活拠点となる後者の設計には、松ノ井の米国経験が活かされただろう。

第5期（1950-1982）：松ノ井建築事務所時代

1950年10月、松ノ井は独立して松ノ井建築設計事務所を東京の久が原に開設した。事務所にはのちに長男・敬一が加わっている。自宅兼事務所は自ら設計したものだった。なお、事務所は1961年に株式会社一級建築士松ノ井建築事務所に改組し、1974年に松ノ井は代表取締役から会長となり、事務所の代表を敬一に代替わりしている。

松ノ井建築設計事務所では、個人住宅から公共施設まで幅広い設計をおこなったが、中心的な仕事はミッション系学校施設や教会の設計であった。学校施設では、青山学院幼稚園（1962）、東洋英和学院幼稚園（1962）、山梨英和学院附属体育館（1963）、教会では青山教会（1963）などがある。青山学院や東洋英和学院は、戦前にヴォーリズ建築事務所が施設設計をおこなった学校であり、当時の関係が独立後の仕事につながったものと思われる。なお、山形市児童文化センター（1963）が建築メディアに掲載された際には、故郷からの依頼に喜びの感情を抱いたことを自ら書き記している¹³。

松ノ井は、東洋英和学園幼稚園を設計するに際して、学校側から提示された「いかにすれば鉄筋コンクリート造りと言うごつい冷たい建物が子どもたちに心理的な圧迫感を与えないようにできるか」という課題を最重視した¹⁴。そして「鉄筋コンクリート造りという強い感じを柔げる為に、例えば庇のディティールなどもできるだけ重厚でなく軽く纏め上げるようにし、外壁の仕上げなどにも木部や焼過煉瓦を多く使用し、建具も総て木製とし」、ガラス戸には色彩を取り入れ、コンクリート打ち放し壁面には彫刻家・桑原臣守によるレリーフを組み、さらには配置計画の工夫などにもよって、モダニズムの建築造形を基礎としながらヒューマンスケールの温かみある空間を実現させた。これには、松ノ井がアメリカで体得した内装設計のノウハウも活かされただろう。一方で、山梨英和学園附属体育館や山形市児童文化センターに見られるように、鉄やガラス、打ち放し仕上げコンクリートの使用に見られるように、モダニズムの造形言語を前面に出した表現にも取り組んでいる。アメリカン・ボザールの最盛期にニューヨークで意匠設計を学んだ松ノ井にとって、日本の建築文化やモダニズムの対応は容易ではなかったかもしれないが、アメリカ留学時にも発揮された持ち前の好奇心と勤勉さによって、それを成し遂げたといえる。

なお、松ノ井は1974年12月から2ヶ月間のアメリカを旅行し、ニューヨーク時代にか関わった建築を見て回った。この旅で若き日の思い出が蘇ったからか、「村野藤吾様 1930年7月5日にこのビルを訪れた記念として 1976年10月21日 松ノ井覚治 (To Mr. Togo Murano / In memory of your visit with this building on July 5th, 1930 / Kakuji Matsunoi / October 21st, 1976)」と記したバンク・オブ・マンハッタン・ビルディングの青図を村野に贈っている。

松ノ井はニューヨーク時代にBAIDに応募した図面を大切に保管し（自らベニヤ板に装丁していた）、自宅の室内に飾っていたという。

上記の成果は、図面資料に加えて、本調査で明らかになった図書や書簡等の資料とその分析、主な作品一覧、年表などとともに、『松ノ井覚治の建築ドローイング：ニューヨークで学んだボザール建築』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2022年）に収録した。

本研究により、松ノ井覚治が日米で受けた教育内容とその成果の位置付け、ニューヨークにおける生活と実務、L・G・チェーピン一家との深い関係、帰国からヴォーリズ建築事務所入所に至る経緯、独立後の活動など、これまで知られていなかった事実が明らかになった。なかでも、第二次世界大戦以前にアメリカに学んだ建築家の具体的な教育と実務の具体的な内容を、その同時代的な評価とともに明らかにできた点は大きな成果である。松ノ井を通して日本と米国の建築教育の水準を相対的に比較することが可能になるなど、今後の国境を超えた建築史研究に貢献する知見を得ることができた。

¹ 主な典拠資料は以下の通り。松ノ井覚治『バンク・オブ・マンハッタン回顧録』（私家版、1982年）、松ノ井久「松ノ井覚治年譜」（制作年不明、個人蔵）および「松ノ井覚治に関するメモ」（同前）、松ノ井覚治旧蔵の各種証書（京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵、AN.5598）。

² 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵、AN. 5597。

³ “Women’s Union Has Curio Exhibition”, *The Brooklyn Daily Eagle*, February 2, 1923.

⁴ “Tompkins Avenue Church Choir Scores in Concert”, *The Chat*, February 13, 1926.

⁵ “Thalians Present Play: “The Mystery Man” to Be Staged in Y. M. C. A. Tomorrow”, *Times Union*, May 24, 1929.

⁶ 松ノ井覚治『バンク・オブ・マンハッタン回顧録』（私家版、1982年）／松ノ井覚治「飛翔の時 回顧録／バンク・オブ・マンハッタン・ビル」として『新建築』1982年12月号に採録。

⁷ 松ノ井覚治旧蔵の書簡（個人蔵）、三宅拓也編『松ノ井覚治の建築ドローイング：ニューヨークで学んだボザール建築』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2022年）に掲載。いずれも原文英語、報告者訳。

⁸ 松ノ井覚治旧蔵の書簡（個人蔵）。『松ノ井覚治の建築ドローイング：ニューヨークで学んだボザール建築』に掲載。

⁹ 前掲「松ノ井覚治年譜」

¹⁰ 人事興信所編『人事興信録』第14版 上（人事興信所1943年）、コ30頁。

¹¹ 前掲「松ノ井覚治年譜」

¹² 『建築文化』29号、1949年7月。

¹³ 『新建築』1963年11月号。

¹⁴ 松ノ井覚治「東洋英和幼稚園設計メモ」『幼児の教育』64巻3号（日本幼稚園協会、1965年3月）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三宅拓也	4. 巻 4
2. 論文標題 松ノ井覚治の建築ドローイング（付 補稿1・2）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 村野藤吾研究	6. 最初と最後の頁 26-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 清水重敦、岩本馨、矢ヶ崎善太郎、石田潤一郎、並木誠士、西田雅嗣、赤松加寿江、三宅拓也、三木順子、平吉幸浩	4. 発行年 2017年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 256
3. 書名 描かれた都市と建築	

1. 著者名 三宅拓也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都工芸繊維大学美術工芸資料館	5. 総ページ数 72
3. 書名 松ノ井覚治の建築ドローイング：ニューヨークで学んだボザール建築	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------